

だれもが充実したいのちを燃やして生きることができるよう!

私たちは地域・職域・学校など、
生活のいろいろな場面で
「健康寿命」をのばす運動を
実践しています。

よぼう医学

THE NEWS OF HEALTH SERVICE

● 今月の主な紙面 ●

- (1面) ● 女性特有のがん検診テーマに
第227回ヘルスケア研修会が開催
- (2・3面(見開き))
 - 連載 どう読む? 健康情報 第5回
 - 新連載 日常生活にひそむ落とし穴
睡眠時無呼吸症候群 第1回
 - 連載 健康づくり・健康増進を支援するページ
保健指導シリーズ 第18回: 医師/保健師/
管理栄養士/健康運動指導士のコラム
- (4面) ● 乳がん検診の受診呼びかけ ピンクリボン in 東京2009
 - 新刊紹介/「職場のメンタルヘルスで困った時に読む本」
 - 第54回予防医学事業推進全国大会が静岡市で開催
 - 第9回日本医学会公開フォーラムが開催
 - 岡田知雄日本大学准教授がランズ賞を受賞

女性特有のがん検診テーマに

第227回ヘルスケア研修会が開催

死亡率の減少めざした

新たな取り組みを紹介

乳がんは、30〜50歳代の働き盛りの女性で死亡率の第1位を占めている(4面に関連記事)。一方、子宮頸がんは、HPV(ヒトパピローマウイルス)の感染が主な原因であることがわかっているが、効果的な対策につなげておらず、近年では20〜30歳代の発症が増えている。これら女性特有のがんは、早期に発見し、適切な治療を行うことで治癒する可能性の高いがんでもあるが、わが国のがん検診受診率は、欧米に比べて極めて低い。そのため、国は2009年度の補正予算で、「女性特有のがん検診推進事業」として216億円を確保、特定年齢の女性に対して、子宮頸がんおよび乳がんに関する検診手帳と子宮頸がんおよび乳がん検診の無料クーポンの配布などを決めた。この推進事業により、受診率の向上を図ることが狙いだ。こうした中、去る9月30日、健康管理コンサルタントセンターと本会が主催する第227回ヘルスケア研修会が、「子宮がん・乳がん検診」新しい流れと問題点をテーマに開催され、本会の長谷川壽彦検査研究センター長(写真上)と坂佳奈子がん検診診断部次長(写真下)がそれぞれ講演した。

最初に「子宮がん検診」について講演した長谷川壽彦センター長は、「癌」と「がん」の違いなど、細胞病理学上の定義について解説した上で、次のように述べた。

「子宮頸がんの主な原因は性感染によるHPVで、日本人女性の約90%が生に一度は感染するとされるが、その大部分は免疫力で排除され自然に治る。100種類ほど存在するHPVのうち15種類ほどが発がんに関係しており、これら高

危険群HPVに持続して感染している場合に、悪性化する可能性が高くなる。



子宮がん全体の年齢調整死亡率は近年横ばい状態だが、子宮頸がんの年代別罹患率のピークは、1975〜85年には60歳代以上であったが、90年以降は30〜40歳代へと若年化している。

さらに、長谷川センター長は「HPV検査を細胞診と併用すれば、ある程度以上の子宮頸部の病変をほぼ100%検出できるとされているが、日本では死亡率減少効果を示す証拠がない」として、HPV検査は対策型検診として推奨されている」と補足した。

また、HPVワクチンが、わが国でも承認されたことに触れ、「ワクチンは、HPV16型、18型でのがん発生をほぼ

100%阻止する。接種時期としてHPVに感染する前の小学校高学年から中学生が推奨されているが、学校現場や保護者へのがん予防教育の徹底、費用(1回最低4万円程度)を誰(どこ)が負担するか、などの課題がある」と述べた。

長谷川センター長は、この他「女性特有のがん検診推進事業」の問題点や子宮がん検診の国際基準である「ベセスタシステム」について解説し、最後に「子宮頸がんは予防可能な病気であり、知識を広める教育を行い、受診率を高めることで、死亡率を限りなくゼロに近づけることができる」と述べた。

続いて「乳がん検診」について講演した坂佳奈子次長は、日本では乳がんの罹患率、死亡率とも増加しており、年齢別の死亡率では30〜40歳代、50歳代、60〜64歳代いずれも乳がんが第1位を占め、罹患率のピークも40歳代であることから、「乳がんは働き盛りを襲うがんである」と指摘した。

坂次長は同時に、乳がんの発症予防は困難だが、早期発

見により治療可能であることを見を強調。「自己検診やがん検診で早期発見に努めることが大切である」と述べた。その上で、マンモグラフィ(MMG)を早くから導入している欧米では乳がんによる死亡率が低下しているのに対し、視触診のみによる検診を続けてきた日本で死亡率が上昇していることを示した。

現在、国ではこうした課題を克服すべく、超音波検査に関するガイドラインの作成を行う一方、各地で講習会を開催し、検査にあたる者の技能の向上を図っている。



「MMGは早期がんのサインである『微細石灰化』も写し出すことができるが、乳腺組織が発達した若年者での乳がんの検出が不得手である。一方、超音波検査には、こうした若年者のがんの検出で、腫瘍を形成する小型のがんに対して威力を発揮し、放射線による被曝もないという長所があるが、『微細石灰化』の描出ではMMGにかなわない

「MMGは早期がんのサインである『微細石灰化』も写し出すことができるが、乳腺組織が発達した若年者での乳がんの検出が不得手である。一方、超音波検査には、こうした若年者のがんの検出で、腫瘍を形成する小型のがんに対して威力を発揮し、放射線による被曝もないという長所があるが、『微細石灰化』の描出ではMMGにかなわない

女性特有のがん検診推進事業

2009年度の補正予算で、国の経済危機対策における子育て支援策の一環として216億円が措置された。この事業では、市町村及び特別区が実施するがん検診において、特定の年齢に達した女性に対して、子宮頸がん・乳がんに関する検診手帳と子宮頸がん・乳がん検診無料クーポン券を送付し、これら女性特有のがん検診の受診を促進するとともに、がんの早期発見と正しい健康意識の普及・啓発、健康の保持・増進を図ることを目的としている。

具体的な対象者

「子宮頸がん検診無料クーポン」は、2008年度(2008年4月2日から2009年4月1日まで)に、20歳、25歳、30歳、35歳、40歳になった女性が対象。「乳がん検診無料クーポン」は、2008年度(2008年4月2日から2009年4月1日まで)に、40歳、45歳、50歳、55歳、60歳になった女性が対象。「検診手帳」は、無料クーポン配布対象者に無料クーポンとともに送付される。

健康管理相談をお引き受けします

当センターの会員が事業所、学校、各種団体の健康管理をアドバイスいたします。

担当: 江幡良晴 三輪祐一

健康管理コンサルタントセンター
事務局 東京都新宿区市谷砂土原町1-2
(財)東京都予防医学協会
電話 03-3269-1141

お問い合わせ・
ご相談は事務局まで
(予約制)

乳がん検診の受診呼びかけ ピンクリボン in 東京2009

乳がん死の減少を目指し 早期発見の重要性訴える

働き盛り世代の女性に多い乳がんは、検診で早期に発見し、治療することで治る可能性の高いがんでもある。しかし、欧米に比べてわが国の検診受診率は極めて低く、このため乳がんで亡くなる人の数は年々増え続けている。こうした中、乳がん月間の10月、乳がんについての理解と検診受診の重要性を呼びかけるピンクリボンフェスティバルが各地で行われ、さまざまなイベントや啓発活動が展開された。このうち、東京都が開催したピンクリボン in 東京2009の「乳がん検診の見学」に本会も協力し、マンモグラフィ検診車の提供などを行った。

乳がんは、日本人女性の20人に1人がかかると言われ、乳がんにかかる人も亡くなる人も増加の傾向にある。中でも、30歳代から50歳代の働き盛り世代の女性では、最も多いがん死の原因となっており、その対策が急務となっている。一方、欧米の乳がん検診先進国では、乳がんにかかる人の数は増加しているものの、死亡は減少に転じている。これは、有効性の確かなマンモグラフィ(MMG)検診の普及によって、乳がんの早期発見・早期治療が実現した成果とされる。



こうした欧米諸国の取り組みに習い、わが国でもMMG検診の普及が図られている。ことに東京都では、乳がん検診の受診率が全国平均を下回る状態が続いており、また死亡率が全国で最も高いことから、一人でも多くの女性

に乳がんへの関心を持ってもらい、乳がん検診を受けてもらうこと、昨年に続き、10月1日に「ピンクリボン in 東京2009」が開催された。会場となった新宿・都庁都民広場に設置された企業や団体の啓発ブースでは、資料の配布、パネル展示などが行われ、大勢の人でにぎわった(写真上)。またステージでは、子どもたちによるダンスパフォーマンスや、乳がんを体験した著名人らによるトークショーなども行われ、19時から都庁舎がピンク色にライトアップされた。



本会が協力した「乳がん検診の見学」コーナーでは、女性技師が、実際の検診機器を紹介しながらMMG検診の手順などを説明した(写真下)。訪れた人たちは、「MMG検診がよく理解できた」などと話していた。

第9回日本医学会 公開フォーラム が開催

去る10月10日、東京・文京区の日本医師会館で、「メタボリックシンドローム―高血圧をメインテーマに、第9回日本医学会公開フォーラム(総合同会) 島本和明札幌医科大学教授が開催された。フォーラムでは、最初に島本教授が、「メタボリックシンドロームの基本概念」について解説した後、わが国の現状について齋藤重幸札幌医科大学講師が、内臓脂肪とインスリン抵抗性について片山茂裕埼玉医科大学教授が、特定保健指導と健康管理について久代登志男日本大学医学部教授が、高血圧の治療について山岸昌一久留米大学医学部教授がそれぞれ講演した。

市民も参加する本フォーラムでは、専門的な内容がわかりやすく解説された。

岡田知雄 日大が
准教授
ランス賞を受賞



長年にわたり本会の小児生活習慣病予防健診を指導し、小児相談室で多くの脂質異常症や肥満の子どもたちを診てきた岡田知雄日本大学医学部准教授が、「胎児、新生児として小児における成長発達と脂質代謝に関する研究」で、日本脂質栄養学会のランス賞(学術賞)を受賞。9月5日に開催された第18回日本脂質栄養学会で表彰された。

新刊紹介

職場でメンタルヘルスの不調を訴える人が増えていることは、厚生労働省の調査にも表れている。従業員が100人いると1人以上が通院したり療養しているのが現状である。私自身も産業医として復職

職場のメンタルヘルスで 困った時に読む本

東急電鉄健康管理センター所長
伊藤克人 / 著

著者は、

専門医で産業医でもある。その著者による本書は、現場で対応に困っている方々にとつ

て何よりのガイドブックになっている。また、「就業状況報告書」就業についての問い合わせ状「理解するための薬の知識(抗うつ薬、抗不安薬、睡眠導入薬や、うつ、躁うつ、パニック障害、強迫性障害、心身症など各疾患のポイントをおさえた説明がなされている。メンタル疾患で受診した後

の療養の流れ、復職の判断、軽勤務から通常勤務に至るまでの過程を、産業医と心療内科専門医、双方の立場を熟知している著者だからこそ、さまざまな例をわかりやすい視点で対話方式(登場人物は本人、家族、上司、担当者、主治

医、産業医などで解説している。また、「就業状況報告書」就業についての問い合わせ状「理解するための薬の知識(抗うつ薬、抗不安薬、睡眠導入薬や、うつ、躁うつ、パニック障害、強迫性障害、心身症など各疾患のポイントをおさえた説明がなされている。メンタル疾患で受診した後

担当者が管理職のみならず、産業看護職や産業医にも参考になる、常備しておきたいお薦めの一冊である。著者にはよくぞ書いていただいたと感謝したい。【保健同人社発行 1800円+税】

中央会感謝状が静岡県予防医学協会の名波登雄会長に、同会中央会賞が福島県予防医学協会の比佐哲夫理事・事務局長と神奈川県予防医学協会山田上祐次部長の両氏に、同会奨励賞が本会の、上倉喜美枝、吉田志緒子氏ら31人に贈られた。

Cardio Ankle Vascular Index

キャビイ CAVI

検査が

機能アップして使いやすくなりました

さらに心電パッケージを追加することで、心電図検査も可能になります。



〒113-8483 東京都文京区本郷3-39-4 TEL (03) 3815-2121 (代) <http://www.fukuda.co.jp/>

お客様窓口… ☎ (03) 5802-6600 / 受付時間: 月~金曜日(祝祭日、休日を除く) 9:00~18:00

● 医療機器専門メーカー **フクダ電子株式会社**

コンパクト
カラー液晶

院内
システム
対応

R-R検査

心電
パッケージ
追加可能
(オプション)

血圧脈波検査装置

VaSera™ VS-1500N

医療機器承認番号: 21800BZX10162000

